



＜教職員発掘調査体験研修（喜多方市小田高原遺跡）＞

「教職員発掘調査体験研修」の様子

平成22年8月4日（水）～6日（金）の3日間、喜多方市慶徳町山科の小田高原（おだこはら）遺跡でまほろん文化財研修「教職員発掘調査体験研修」を実施し、学校の教職員の方8名が参加されました。本研修は、発掘調査の現地研修を通して、埋蔵文化財の保護について理解と関心を高めるとともに、実体験をもとに授業に役立ててもらうことを目的に毎年学校の夏休み期間中に行っています。研修を行った小田高原遺跡は、会津地方の大河である阿賀川の右岸に位置する古代の遺跡で、今年度から阿賀川狭窄部改修事業関連で福島県教育委員会の委託を受けて、（財）福島県文化振興事業団遺跡調査部が発掘調査を行っています。調査区域からは、古代の竪穴住居跡や須恵器窯跡などが発掘され、土師器や須恵器など数多くの遺物が見つかっています。研修は平坦部の遺構の検出・精査作業を中心に行われました。

研修期間中は記録的な猛暑でしたが、遺構の検出から掘り込み・カメラ撮影、土層の見分け方まで一連の作業を体験しました。現場の作業員さんと共に発掘調査の雰囲気を感じてもらえたことが何よりの成果といえます。

また、最終日は発掘現場周辺の史跡・遺跡見学を行い、喜多方市の新宮熊野神社・古屋敷遺跡（古墳時代の豪族居館跡）、会津坂下町の亀ヶ森古墳（前方後円墳）・鎮守森古墳（前方後方墳）、陣が峯城跡（古代末期の城館跡）など福島県下でも著名な国指定の史跡・遺跡を実際に目にして、遺跡の大きさ、歴史の重みを感じ取っていただきました。実際に「本物」に触れることはとても大切なことです。教科書の内容を確かめ、深め、さらに発展させていくためにも今回の体験を有効に活用していただきたいと思います。

体験学習

実技講座「カラムシから布をつくろう」

カラムシはイラクサ科の多年草で、苧麻ちよまともいい、木綿が普及するまでは日常着の材料として広く利用されていました。『魏志倭人伝』にも記述があるなど、その栽培の起源はかなり古い時代にさかのぼります。現在も、福島県の昭和村や沖縄諸島で布を織る原料として栽培されています。

実技講座「カラムシから布をつくろう」は、このカラムシから繊維を取り出し、糸を紡いで、アングインと呼ばれる編み方で布を作るまでを体験するもので、まほろんでは毎年実施しています。今年度も全3回の講座を開催し、多くの方にご参加いただきました。

第1回目では、まほろんの古代の畑でカラムシを刈り取り、“苧引き”お引きとって、茎の表皮を剥いで白い繊維を取り出しました。繊維は陰干しし、第2回目

実技講座「家族で縄文土器をつくろう」

講座には、4組のご家族が参加され、第1回目の7月24日（土）に土器を製作し、第2回目の8月21日（土）に土器を焼成しました。

土器の製作では、まほろん職員が縄文土器の形の移り変わりや用途等について講義をし、また基本的な土器ひもの作り方を説明しました。縄文土器は「紐作り」と言って、粘土の円盤を土台にして粘土の紐を積みあげて形を作り上げます。参加者の皆さんは、モデルの縄文土器を参考にしながら、それぞれに個性あふれる土器を作りました。2歳のお子さんをお連れのあるご家族は、お子さんを遊ばせながら、お父さんとお母さんが交替で高さ20cmを超える大きな土器を作りました。

土器の野焼きは、午前10時頃から土器を焚き火おきの周りに並べ、1時間ほど十分に乾燥させます。次に織

実技講座「古代の染色にちょうせん」

古代から布や糸を染めるために、様々な染料が用いられてきました。中でも藍染めと呼ばれるのは、青の色素（インディカン）を持つ植物を利用した染めものことで、日本では古くからタデアイが使われてきました。タデアイは花を咲かせる直前の7月末から8月に葉の部分に青の色素を蓄えるため、藍染めにはこの時期の葉が使われます。徳島県などでは葉を発酵させた“すくも”が使われますが、まほろんでは、主に生葉染めでの絹布の染色体験を実施しています。

講座では、まず模様をつけるために絹のストールを輪ゴムなどで縛ったあと、古代の畑でタデアイを刈り取りました。タデアイの葉を水の中で揉んで染液を作り、これにストールを浸して染め、さらに屋外で日光に当て、これを2回繰り返します。初めは濃い緑色ですが、空気に触れることで徐々に青っぽくなります。これは葉に含まれる無色のインディカンが、酸素に触



＜アングイン編み＞

で糸に紡ぎました。今回はコースター2枚分の20mを目標に糸を作りました。第3回目のアングイン編みでは、“越後アングイン”の技法を取り入れました。これは横糸を3本使い、縦糸を一目ずつ飛ばして編む技法で、従来のアングイン編みより編み目が細くなります。少々複雑な編み方ですが、皆さん上手にコースターを仕上げることができました。



＜縄文土器づくり＞

になった薪まきの中央に土器を移し、周りから少しずつ薪を投入して火力を上げていきます。3時間をすぎて土器が黒く煤すすけてきた頃、参加者の皆さんが見つめる中、大量に薪を投入し一気に焼き上げました。割れた土器は1個もなく、皆さん喜んで作品を持ち帰られました。



＜みんなで記念撮影＞

れて青色のインディゴに変化するためです。

最後に水洗いすると、鮮やかな浅葱色あさぎいろ（黄色みがかかった青色）に染まりました。輪ゴムで縛った部分にもさまざまな濃淡の模様が現れました。世界に一つだけの自分だけのストールを染めるのに成功し、皆さん、とても満足気な表情でした。

出前講座の様子

学芸員が公民館などに出向いて体験学習メニューを提供する「出前講座」。本年は、相馬市の山上公民館と郡山市の片平公民館で実施しました。山上公民館では、地域の小学生 25 名に土器さわりと弓矢体験、片平公民館では 13 名の方々に土器さわりと勾玉づくりを体験していただきました。片平公民館(右の写真)では、講座が進むにつれ、本物の土器を興味深そうに覗いたり、勾玉を熱心に作る姿が印象的でした。

来年度の出前講座の募集要項は、平成 23 年 2 月頃、ホームページに掲載する予定です。みなさんも、古代



＜土器さわり体験（片平公民館）＞

の文化に触れてみませんか。

森林文化講演会の様子

8 月 14 日（土）、ふくしま森林文化企画展の関連事業として、森林文化講演会「原始・古代の森の資源の利用」を開催しました。講師にお迎えした首都大学東京教授山田昌久氏は、人が森林資源の利用のために、どのような工夫と改良を積み重ねていったのかを、研究している方です。その手法は、綿密な発掘調査データに基づいた「実験考古学」というユニークなもので、午後の講演では、特別に石斧の伐採実演をお願いしました。

写真はその時の様子です。この実演では、縄文時代と弥生時代の 2 種類の石斧の切れ味を比較しました。その結果、縄文時代より厚手の弥生時代の石斧に持ち替えた途端に、切れ味がアップ。直径 20 センチ



＜石斧による伐採実演＞

の丸太が真っ二つになった瞬間には、見学者から大きな歓声が上がり、道具の進化が生んだ効果を全員実感した様子でした。

企画展示案内

ふくしま里帰り展「ふくしまの土偶」

会期：9 月 25 日（土）～ 11 月 28 日（日）

会場：まほろん特別展示室（入場無料）

土偶とは、縄文時代に作られたヒトガタの土人形です。多くが女性をかたどっていることから、その意味については、安産を願ったものであるとか、豊かな暮らしを祈ったものであるとか、さまざまに考えられています。

土偶は福島県内でも数多く見つかっており、日本の土偶研究の基礎的な資料として重視されてきました。その一部は県外で保管されており、今回の展示は、それらの土偶をふくしまに「里帰り」させるという企画です。里帰りする土偶は、東京大学と東北大学で保管されているもので、縄文時代の後半から終わりにかけての、とても貴重な資料です。また、昨年イギリスの大英博物館「THE POWER OF DOGU」展で展示された、福島市上岡遺跡の「うづくまる」土偶と郡山市荒小路遺跡のハート形土偶、さらに、福島県の指定文化財となっている、三島町荒屋敷遺跡、柳津町石生前遺跡出土の土偶も展示します。このほかにも県内出土の土偶



＜展示する土偶の一例＞ 左上から、三島町教育委員会提供、福島市教育委員会提供、三春町教育委員会提供、柳津町教育委員会提供、新地町教育委員会提供、小野町教育委員会提供

をたくさん展示しますので、ふくしまの土偶がどのような姿をしていて、どのように移り変わったのかを、是非ご覧いただきたいと思います。

なお、展示に関連して、土偶研究の第一人者、原田昌幸氏（文化庁主任文化財調査官）の講演会（10 月 17 日）を実施します。土偶の持つ意味や時代毎の移り変わりや造形美の美しさなどについて分かりやすく講演していただきます。

福島県内で発掘された土偶から、縄文人のココロの世界に触れてみてください。

文化財研修のご案内

10～12月の研修

平成22年の10～12月の文化財研修は次の5コースを予定しています。

10月2日(土)は、考古学基礎講座Ⅳ「福島県考古学研究史 中通り(東北道・新幹線調査の頃)」を行います。福島県の考古学研究史を県内各地の研究者の業績から学び、地域史の理解を深める研修です。10月16日(土)の体験学習支援研修Ⅱ「土偶づくり」は、体験学習を文化財啓発や公民館活動、学校教育に応用しようとする方々のための研修です。

11月には、11月13日(土)に専門考古学研修Ⅱ「福島県の土偶」を行います。ふくしま里帰り展「ふくしまの土偶」で集結した県内各地の土偶を実際に観察し

その変化を学びます。11月20日(土)は、土器復元研修「化学素材による土器の修復」を行います。土器の復元や修理・補強に使用する強化材料について



＜古墳時代前期の土師器(小野町落合遺跡出土)＞

の研修で、最適な強化材の選定方法を学びます。

12月は、12月11日(土)に専門考古学講座Ⅲ「土師器の見方(古墳時代前期)」を行います。当館に収蔵されている古墳時代前期の土師器を観察し、当該期の土器研究方法などについて理解を深める研修です。

シリーズ収蔵品紹介 11

関林A遺跡出土の瓦

まほろんの収蔵品には発掘調査で出土した遺物以外にも、試掘調査で出土したものや表面調査で採集されたものがあります。そのなかでも、今回紹介する収蔵品は、昭和60年度の試掘調査において、白河市(旧東村)関林A遺跡で採集された瓦です。

関林A遺跡は阿武隈川の支流である矢武川沿いに位置する奈良・平安時代の集落跡です。瓦が採集された場所からは、焼土などがみられないことから、瓦を焼いた窯跡ではないようです。さらに、採集された地点の近くから、径1mほどの平らな石がみられたとのこと。この平らな石については、現在では検証はできませんが、礎石建物跡の礎石とも推定できます。

採集された瓦は、丸瓦と平瓦があります。そのなかでも、丸瓦は無段式で遺存状態が良好なものです。

奈良・平安時代では、瓦が葺かれた建物は寺・役所などに限られます。そのなかでも、役所の重要な建物である倉庫などの屋根に葺かれていました。その1例として、まほろんの野外展示にある奈良時代の倉庫が挙げられます。この建物は泉崎村関和久遺跡で発見されたものを復元したものです。

瓦が採集された関林A遺跡に役所の倉庫があったの



＜白河市(旧東村)関林A遺跡出土の瓦＞

かどうかは、発掘調査が実施されていないために、明確ではありません。しかし、集落内に役所の倉庫が設置されていたという文献例もあるので、関林A遺跡にも倉庫が存在していた可能性も窺われます。

このようなことから、関林A遺跡で採集された瓦は、集落と役所との関わりを探る上で、意義深い遺物であります。(主任学芸員 吉野滋夫)

まほろんからのお知らせ

土偶や土面がつくれます

ふくしま里帰り展「ふくしまの土偶」の開催にあわせ、11月6・27日(土)に実技講座「家族で土偶・土面をつくらう」を行います(※事前申し込みが必要)。粘土で土偶・土面をつくり(6日)、野焼き(27日)まで体験します。縄文人の技術に挑戦してみませんか?



ご利用案内

開館時間 9:30～17:00(入館は16:30まで)

休館日 月曜日(月曜日が祝日・休日の場合はその翌日、ただしGW・夏休み期間中は開館)、国民の祝日の翌日(土曜日・日曜日にあたる場合は開館)、年末年始(12月28日～1月4日)

入館料 無料(体験学習によっては、材料費が必要な場合もあります。)

その他 団体(20名以上)でご利用の場合は、事前にご予約ください。